

フィールドワーク教育って

なんだ？

TELL ME WHAT  
FIELDWORK EDUCATION LOOKS LIKE.

公開シンポジウム

北九州市立大学  
受講無料  
高校生・大学生  
歓迎

公開シンポジウム 2016年11月11日(祝) 10:00~17:00

北九州市立大学 北方キャンパス本館 A101 教室 (定員 500 名) 【共同主催】 濫澤民族学振興基金 『「大学教育とフィールドワーク」に関する実践経験交流と教材開発』 ◆ 日本文化人類学会課題研究懇談会 『応答の人類学』 ◆ 北九州市立大学 『動物のみかた』 『人類学概論／文化人類学』 特別講演 ◆ 九州人類学研究会 ◆

# 新しい教育改革の潮流と、フィールドからの学び

近年の国際化と急速な社会変化に対応するために、大幅な教育の見直しが検討されている。それは従来のような「何を教えるか」という知識の質や量の改善にとどまらず、「どのよう

に学ぶか」という学びの質や深まりに注目した新しい教育改革の流れである。

学校教育法には学力の三要素として「基礎的な知識及び技能」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」が示されている。従来型の系統学習がこのひとつの要素であるとするならば、後者のふたつの要素が新しい改革の柱である。文科省の中教審答申

においても、問題解決型学習(PBL)やアクティブラーニング(AL)など、課題の発見と解決に向け主体的・協働的に学ぶ学習プロセスへの重点化が随所にうたわれている。

これらいわゆる21世紀型スキルは、初等教育から高等教育にいたるそれぞれのプロセスで達成すべき課題として学習指導要領に明示され、とくに高等教育ではグローバル人材育成や環境教育、持続発展教育(ESD)など、新しい社会変化に対応する教育課題への応用が期待されている。

しかし一方で、こうした教育は従来型の多人数で座学中心の教授方法では難しいとされ、多様な状況に即した実践的な学習をどのように進め

ていくのかを、教育現場が模索している現状がある。

さて、これら実践教育のコアとなっているのがフィールドワークである。本シンポジウムでは、これまで一〇年以上にわたり環境教育・技能習得・社会実践・調査研究における分野で数多くの成果を積み上げてきた四名の話者が、「フィールドからの学びはフィールドワーク教育になり得るのか」という視点から、現状に対する批判も含めて、それぞれの活動の背景や実践成果、そしてその可能性について議論する。

井上は、プログラム化された既存の環境教育に対する違和感をもとに、予想外の発見がもたらす自然の楽しみ、さらに活動を通じた社会との関わりについて語る。

命婦は、子育て世代の社会的スキルの希薄さを改善するために、日常的な場を用いたコミュニケーションを通して親子が状況的に人間関係を学んでいく新しい社会的スキルトレーニング(SST)を提案する。

木下は、市場における店舗運営実践を通じた学生たちの知識習得の型を検討し、社会が用意するシナリオと自発的なアドリブとのせめぎ合いの妙味について語る。

竹川は、正統的周辺参加(LPP)の観点から教師の役割として「教えないこと」と「舞台を用意すること」の二点を指摘し、学びにおける個性と創造性の源泉を明らかにする。

さらに総合討論では、研究や教育の枠を越えた多分野のディスカッションからの問題提起と白熱議論を用

意している。

現在、全国の大学をはじめ多くの教育機関が制度改革を模索している。しかし、皮肉なことに、制度側が目的を設定し手取り足取り準備すればするほど、学びの能動性は失われ、本来の趣旨から乖離していく実態がある。数値目標や参加型評価など安易な方法論に陥ることなく、成果をあげるための実践(学習)とそれを可能にする制度(教育)との距離を真剣に検討する必要があるだろう。

フィールドワーク教育としてのノウハウがあるとすれば、それはどこにあるのか。そうした問いを通して、このシンポジウムのすべての参加者に「誰かに与えられる教育ではなく、自分から求める学び」の一端を感じて欲しいと願っている。

# Program



2016年 **1月11日(祝)** 10:00~17:00

## 10:00-10:40 環境教育再考

井上大輔 ◆ 生きもの好きが発信する魚部という「場」

## 10:40-11:00 問題提起 1

上野 由里代 ◆ 岩野 俊郎 ◆ 松田 凡

## 11:00-11:40 第3の SST

命婦 恭子 ◆ 市場から人付き合いを学ぶ「たんたんマルシェ」

## 11:40-12:00 問題提起 2

伊藤 泰信 ◆ 眞鍋 和博 ◆ 辻 利之

## 12:00-13:30 昼休み

ミツバチの巣箱視察

## 13:30-14:10 市場のテクネー

木下 靖子 ◆ 「大學堂」の実践にみられるシナリオとアドリブ

## 14:10-14:30 問題提起 3

古藤 あずさ ◆ 内藤 直樹 ◆ 松田 幸三

## 14:30-15:10 野研という可能性

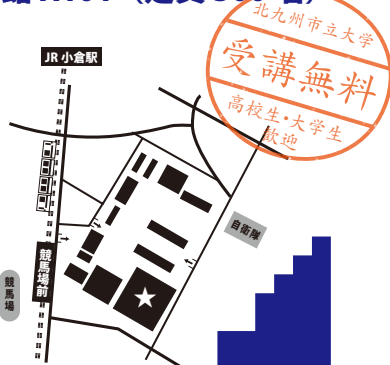
竹川 大介 ◆ 正統的周辺参加によるスキルからアートへ

## 15:10-15:30 問題提起 4

片岡 寛之 ◆ 久間 直樹 ◆ 瀬瀬 あや

## 15:30-17:00 総合討論

北九州市立大学北方キャンパス  
本館 A101 (定員 500名)



北九州市立大学  
**受講無料**  
高校生・大学生  
歓迎

受講は無料です。

高校生・大学生・教員・興味がある市民の皆様  
どなたでも聴講いただけます。

申し込みは不要ですが、資料作成の都合上、  
事前にご連絡いただくと幸いです。

演題の一部聴講や途中入室も可能です。  
会場へは公共交通機関をご利用下さい。

【問合先】

竹川大介研究室  
daisuke@apa-apa.net  
093-964-4167

公開シンポジウム  
FIELDWORK EDUCATION LOOKS LIKE...  
フィールドワーク教育ってなんだ?

10:00-10:40 環境教育再考 生きもの好きが発信する魚部という「場」

10:40-11:00 問題提起 1

## 井上大輔

県立高校の国語科教諭。1998年に部活動の「魚部」を始める。地域の自然調査の成果をもとに水環境館や自然史博物館で展示をおこない『紫川大図鑑』などの著書を編集出版。2015年度から市内に拠点をつくり「だれでも参加できる新しい魚部」をスタートさせた。これら魚部での活動を通じた自然環境への関わり方を研究し博士論文にまとめるため、北九州市立大学大学院社会システム研究科博士後期課程に在籍中。



上野 由里代

魚部 副代表 (高校魚部 OG)。福岡工業大学 社会環境学部の一年生で、ピオトップ研究会に所属。魚部でゲンゴロウやガムシなどの水生昆虫と出会い、人生が変わった。世界でただ一人の「水生昆虫伝道師」となるべく、現在は各地の水辺で武者修行の日々を楽しんでいる。また、「イケメンよりゲンゴロウ」をテーマに掲げて、水生昆虫の展示や講演会などの普及活動にも精力的に取り組んでいる。



岩野 俊郎

日本獣医畜産大学の獣医学科卒業。以来津遊園、到津の森公園に勤務。獣医らしいことも園長らしいこともしたことはない。最近はイルカ問題やマレーグマ、ゾウ問題など頻発し、「このままでいいのか！動物園！」。日本の動物園の新しい姿を探りつつ前進しようと思っている(あくまでも思っている段階) 9 地方動物園の園長。「国立動物園を考える会」副代表！



松田 凡

1958年生。京都文教大学教授。専門は文化人類学、アフリカ地域研究。京都の里山育ち、エチオピアでも川沿いの村に滞在すること数年、現在は滋賀県に住んで、やはり琵琶湖周辺の水環境と人の暮らしに関心を持つ。学生を連れてアフリカへ行くこと 10 年、フィールドで学生が育つ姿をいつも頭に描きつつ、教育とは何かを考える。

11:00-11:40 第3の SST 市場から人付き合いを学ぶ「たんたんマルシェ」

11:40-12:00 問題提起 2

## 命婦恭子

西南学院大学短期大学部保育科准教授。公立小中学校スクールカウンセラーを兼任。臨床心理士。大学教員として 2005 年より臨床心理学科、2012 年より児童教育学科に勤務し、就学前の子どもたちや子育て中の保護者と接する機会が増えた。児童生徒の心の問題に対応していく中で、就学前の経験の重要性を感じている。2014 年に現職に就くにともない北九州市へ赴任、親子参加型の SST を開発し実施している。



伊藤 泰信

北陸先端科学技術大学院大学 (JAIST) 准教授。英国ロンドン大学 UCL 客員研究員。文化人類学者。文化的主権回復運動を先鋭的に展開しているニュージーランドの先住民マオリをめぐる知と社会の動態についての研究に従事してきた。近年は、文化人類学のフィールド調査手法であるエスノグラフィを介して、医療やビジネスの現場の実務者らと協働する研究実践に力を入れている。石川 (本校) と東京 (サテライト) を年間数十回往復しつつ、社会人大学院の学生教育にも力を注ぐ。



眞鍋 和博

リクルート出身。キャリアセンター専任教員を経て 2009 年から地域創生学群専任。PBL や SL を地域で展開するためのコーディネーターや学生指導を行う。また、同大学地域共生教育センター長や魚町商店街内にキャンパスを設置した市内 10 大学連携の北九州まなびと ESD ステーション事業責任者も務める。計約 60 プロジェクト、1,000 名の学生が北九州地域での実践的な地域課題解決活動を常時展開している。We Love 小倉協議会副会長をはじめとして地域での様々な役割も担う。



辻 利之

小倉の街中で生まれ育つ。(現 61 歳) 小倉の中心市街地の活性化に精力的に参加。We Love 小倉協議会 (小倉の情報発信チーム) 会長。京町銀天街協同組合理事長。/ 本業は、日本茶老舗の店主。「スタンスはローカル (小倉) に、ビジョンはグローバルに」をスローガンに掲げ、お茶を使ったデザートを開発する等、茶離れの若者へ日本茶をより身近なものへと、カフェ併設の業態変換。現在積極的に海外展開中。(株) 辻利茶舗 取締役会長「街づくり」と「店づくり」の同時進行の必要性を唱える。



13:30-14:10 市場のテクネー「大學堂」の実践にみられるシナリオとアドリブ

14:10-14:30 問題提起3

## 木下靖子

専門は人類学。南太平洋のバヌアツ共和国メリック島、フツナ島、沖縄伊良部島、石垣島、瀬戸内海鷓島など、島嶼部をフィールドに、人の移動、旅、自然利用に関する知識のありかたを研究している。2008年にオープンした旦過市場の大學堂を拠点に、行き交うひとびとと交流しながら、研究活動をおこなっている。竹を組んで作る遊動生活型シェルター「スター★ドーム」の棟梁でもある。



## 古藤 あずさ

島根県松江市出身。大学進学で多くが上京する中ひとり南下し北九州市立大学へ。勉強は机に向かってするものと教えられ、成績至上主義であった。野研と出会い、旅と対話と海山・市場の大学生活を送る。始めは何をしているのかわからず、怪しみながら参加していた活動の意味も、ここにきてようやく見えてきた気がする最終学年。3年次から1年間マレーシアのサラワク大学に留学、帰国前は山奥の先住民の村で1カ月超過です。将来はサラワクの熱帯ジャングルで暮らす予定。



## 内藤 直樹

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了。博士(地域研究)。東アフリカ牧畜社会を対象に、地域で培われてきた知恵、わざ、価値観等にそくした開発や難民支援に関する研究をおこなってきた。また徳島ではローカルな津波避難支援用具の開発、遺産観光開発による地域づくりや鳥獣害対策のビジネス化を社会調査実習に組み込んだ教育活動をおこなっている。著書に『社会的包摂／排除の人類学：開発・難民・福祉』等がある。



## 松田 幸三

小倉に住んで5年。ついに大學井評論家の称号を得た。光栄の極みだ。週2回は大學井を食べているだろうか。多くて3回、月にすると10回。丼一杯が200円だから、どんなに頑張っても大學堂への貢献は月2000円程度。一度の飲み代にもならない。だが、ここでの昼食の自身は濃い。市場のおじさんや学生店長とのやりとり、一見客との触れ合い。食べることが何と楽しいかを味わえる空間だ。



14:30-15:10 野研という可能性 正統的周辺参加によるスキルからアートへ

15:10-15:30 問題提起4

## 竹川 大介

大学では探検部に所属し海や山や海外を歩き、大学院では理学部人類進化論研究室で人類学を学ぶ。学生時代を通して、マンガの連載と出版、コンピュータソフトの開発、シンセサイザー奏者、J R西日本フリーペーパー編集、沖縄石垣島での漁師などを遍歴した。1996年より北九州市立大学に赴任し野研を立ち上げる。大学では太平洋島嶼国でのフィールド研究をもとに「わかるとは何か」について講義をしている。



## 片岡 寛之

北九州市立大学地域戦略研究所・地域創生学群准教授。(株)北九州家守舎取締役。ゼネコンで2年間の現場管理業務、シンクタンクで6年間の調査業務を経て現職。学生時代に抱いていた、大学での学びと実社会との隔たりへの違和感と、それに対する答えとして、実学重視の想いを胸に、学部運営に携わっている。そして、机上の空論にならぬよう、常に自ら実践し、そこから学習するサイクルを繰り返し、その経験を伝えるよう心がけている。



## 久間 直樹

RKB毎日放送の「アジア戦略室」兼「北九州支社報道部」部長。報道部に26年間在籍し、05年～08年初めまでTBSソウル支局で特派員として勤務。その間、同乗取材した漁船が沈没するも九死に一生を得る。報道ドキュメンタリーの制作ではパジャワール会の中村哲氏をアフガニスタンで取材。近年では「日章丸事件」の主役で、出光興産の創業者：出光佐三をテーマに取材。この番組では、日本とペルシャ湾を往復するタンカーに1か月半同乗した。



## 瀬瀬 あや

映画監督。東京生まれ。自由学園卒業後、自分に何ができるのかを模索し続ける中で、写真家・映画監督の本橋成一と出会う。2008年より上関原子力発電所計画に反対し続ける山口県祝島に通いこみ『祝の島』を初監督。2013年には大阪貝塚市の北出精肉店の家族の暮らしを描いた二作目『ある精肉店のはなし』が公開され、文化庁映画賞文化記録映画部門大賞などを受賞。二作とも「暮らし」を映し撮ることをテーマに、自らも現地で長期にわたって住み込みながら映画制作をしている。

